



東北の名溪、八久和川の名所でもある呂滝に手軽に辿り着き、釣りを楽しむには大井沢から入溪し、天狗角刀取山を経て登山道を利用し、出谷川出会い(八久川上流部は出谷川へと名前を変える)に降り立つルートが一般的である。

しかし、我々は中流部から釣りを楽しもうという事で、平江さん提案の乗越ルートで臨むこととなった。それは茶畑山と柴倉山のコルを乗越し、茶畑沢を下降して出谷川に降り立つ、過去に記録の無い新規ルートである。……だが茶畑は名前に似つかわしくない厳しい沢だった。

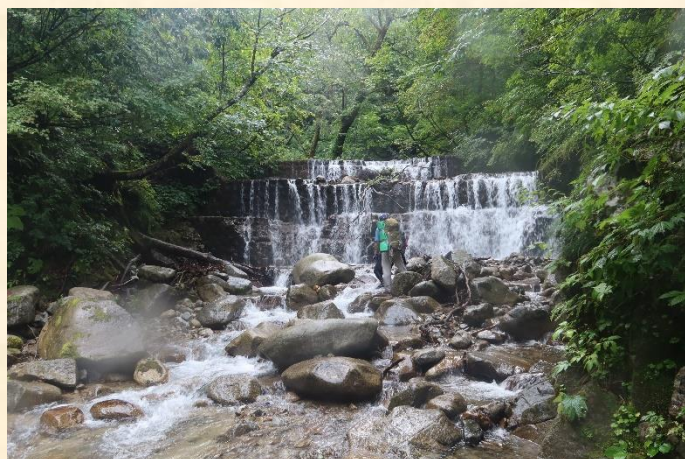
(0日目)

西那須野塩原に集合し私の車一台で山形県へ向かう。長時間の運転で疲れてきた頃、ようやく車止めに到着。前夜祭は大いに盛り上がり、明日の英気を養う。

(1日目)

7:00

翌朝、平江さんと私は大貫隊長が持参してくれたテントで快適な睡眠を得て起床。大貫さんとはいうと、テントを私たちに譲り車の中で寝たが、車に侵入していた大量の蚊と死闘を繰り広げたことで、ろくに寝れなかったらしい。ザックに共同食料を詰め、皿沢の遡行開始。



堰堤が多い皿沢



快調に進む



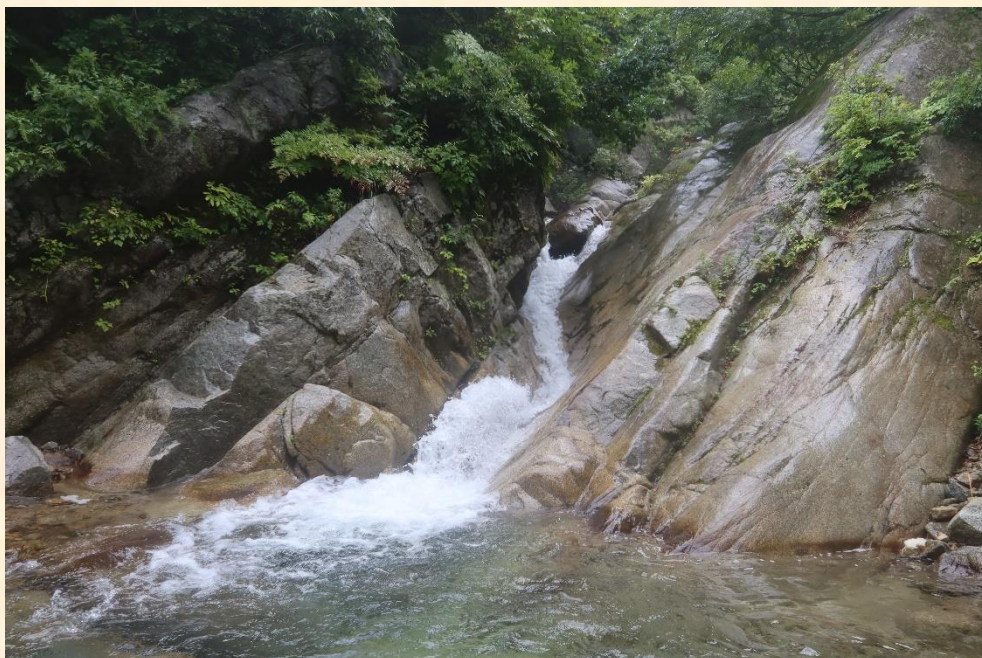
小滝



沢は徐々に狭く

10:00

沢が徐々に狭くなり、滝が出てきそうだなと思っていたら、大迫力のウォータースライダーが出現。岩肌はツルツルだ。**突っ張りながら進む**しかない。平江さんと私が悩んでいると、大貫リーダーが「俺、行きますよ」と先陣を切って見事に突破。平江さんと私も後に続く。



激流ウォータースライダー



先陣を切る大貫リーダー



お見事！



平江さんも続く



楽しそうな平江さん
(ピースありがとうございます)

途中、驚くべき光景を目の当たりにした。ちょっとした淵に泣尺サイズの魚が群れをなしている。たまに見るハヤの群れかと思ったが、よく見ると特徴的な白い斑点が・・・全部岩魚だ！！だが当然ながら岩魚は群れる魚ではない。産卵のペアになっているわけでもないし、本当に不思議。

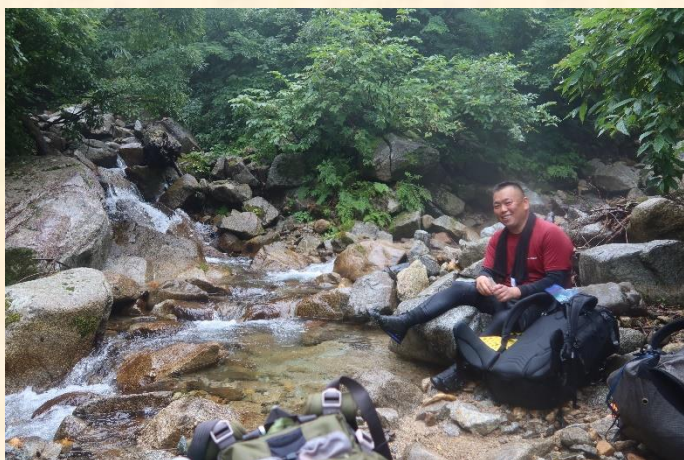
平江さんも「初めて見たよ、こんな光景」と驚きの様子。



ハヤの群れ？
いいえ、岩魚の群れ



特徴的な白い斑点



ご満悦の大貫さん 二俣にて



滝と大貫さん



登りづらかった堰堤
平江さんが空身で突破



ロープを出す前に登ろうとして転び
尖った石で腰付近に軽傷を負う(黒須)

14:30

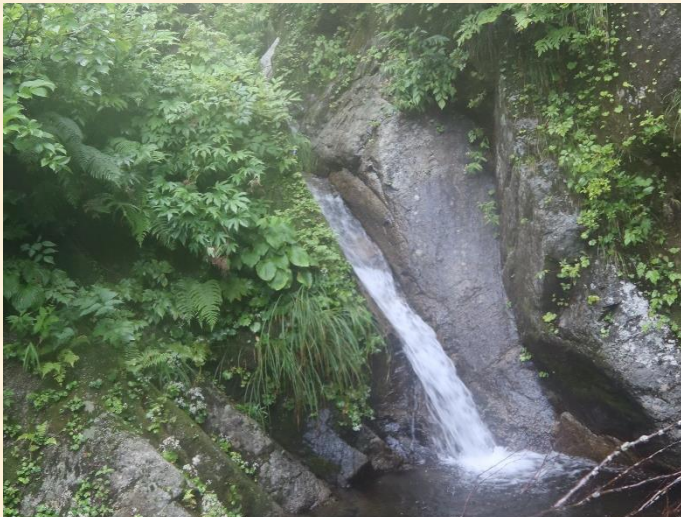
コルに到着するが、想定していたよりも藪に覆われていて視界は悪い。斜面を枝に頼りながら下り、茶畑沢源頭部に降り立つ。あとはこの沢を下降していけば目的地の出谷川本流は目前だ！



茶畑沢の源頭付近

17:30

だが茶畑はそんなに甘くなかった。滝が尋常じゃないほど多い。歩いて進むのではなく、**小滝を何十段も降りながら少しずつ前進**する感じだ。持てる技術をフル活用しなんとかロープを使わず降りていたが、一々足止めになるため全然直線距離をかせぐことができない。夕暮れも迫ってきた。予定地より大分手前だが急いでテンバを探すことに。平江さんが手頃なテンバを見つけ、初日の行動は終了。



こんな感じの滝が無数に



一か所だけは垂直滝、念のためロープ使用

19:00

早朝の雨で薪はかなり水を含んでいたが、木っ端(濡れてる)も十分にあるしなんとか燃えだそうと火付け開始。ガムテに火を付け、上に木っ端の束をドンと載せて、水蒸気が勢いよく上がる。しかし次第に水蒸気は勢いが弱まり、ついには鎮火。(私のガムテが安物だったのも原因の一つか…)

濡れてるから仕方ないと、それを何度か繰り返す内、極細の木っ端は燃え尽きる。今まで同様の状況で火付けをしてきた経験はあるが、今回は大苦戦。更にガムテを入れるために木っ端の束を何度も持ち上げたことで、束が乱れてしまった。

見かねた平江さんが「**究極の火付けを教えてやる**」と言い、火を付けたガムテの上に極細の**木っ端を一本載せ燃やし始めた**。そしてその一本に火が付いたら、更に木っ端を一本載せる。そのスケールは直径 5cm 位で、まさに**究極の極小焚火**。それを数十本になるまで繰り返し火が安定してきたことを確認してから、木っ端の束をドンと載せた。するとしばらく水蒸気を出したのち、力強く火が上がった。私はこの技を一生忘れない。

宴会では、平江さんがとってもジューシーなローストカモ、大貫さんが甘酸っぱく元気が出るトマトカレーと、こだわりのおつまみを作ってくれた。どちらも本当に絶品でした！！私は普通の麻婆春雨…最近一品料理まで軽量化に走っていることがお二人に感づかれているようだったが…気のせいと願いたい。

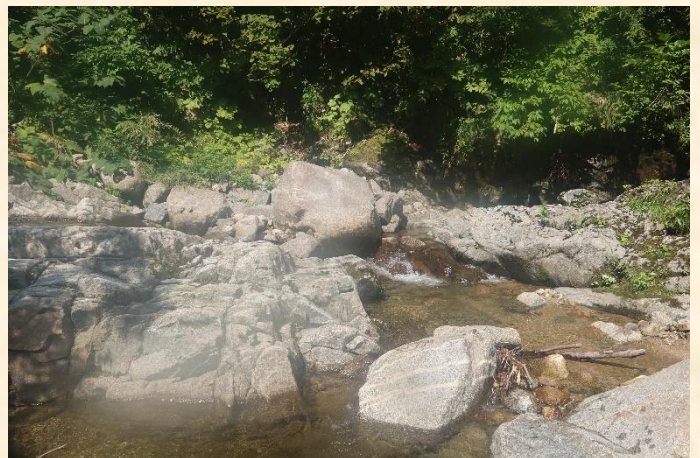
(2日目)

09:00

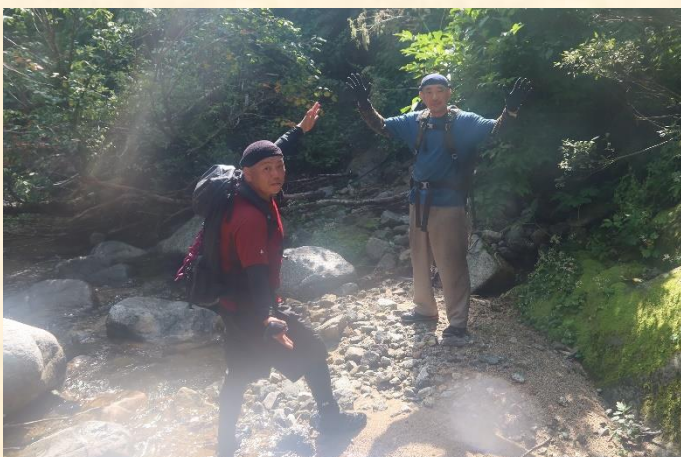
朝食を済ませ出発。テンバは移動せずに、ここを拠点とした。



しっかり朝食を食べ出陣



二俣



二俣付近にて



大滝

2日目も、頑張れば降りられなくはない小滝の連続。少しずつ前進する。しかし突如 15m 程度の大滝が出現。ここは飛び込むしかなさそうだとすることで、滝の中腹辺りまでなるべく下がったあとに釜へ飛び込む。

～【フォールハイ劇場開幕】～

釜へ飛び込む直前から二人の様子に**異変**が。やたらテンションが高い。どうやら**フォールハイ症候群**にかかり始めているようだ。フォールハイ症候群は滝(フォール)を突破するぎると発症し、極度に興奮したり、奇妙な行動をとったりする。源流では冷静な判断が必須であるため非常に危険な症候である。初日から大量の滝を突破してきたことでついに発症してしまったようだ。大事に至らなければ良いが…。



まずはリーダー



フォールハイ症例1 「背面飛び」



続いて平江さん



フォールハイ症例2 「シェー」

フォールハイになっている二人は、次の滝を欲しているため休憩せずに、すぐ歩き始めた。しかし、標高 830m の二俣(記録ではテンバ適地あり)まで残り 200m という所で、壮大なスケールの**二段の滝**が出現。手前の二段目は落差 6m 程度であるが大きくハング。奥の一段目は落差 15m 程度。兩岸は岩壁で形成されている。私は「**ここもフォールハイで行っちゃうのか！？**」と冷や冷やしたが、幸いにも二人には冷静な判断力が僅かに残っていた。

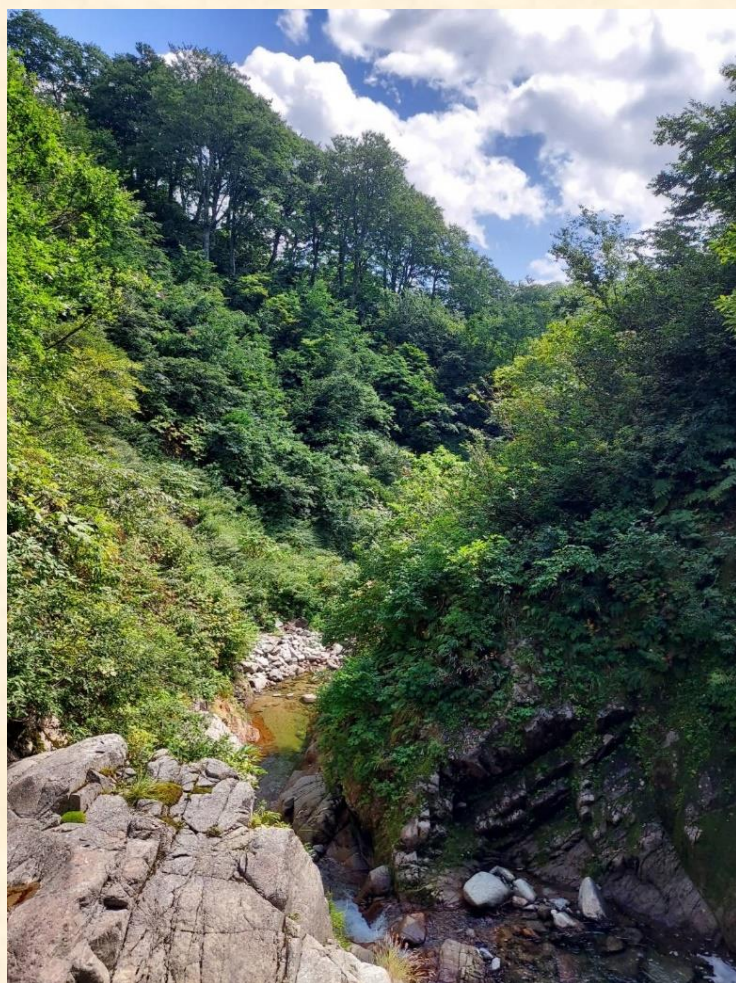
平江さん 「いや～参ったな・・・」

大貫さん 「一段目は釜に飛び込める、二段目もなんとか降りられるだろう。ただ帰りが、**しゃれにならない程の大高巻きになるね**」

初日のテンバに戻る必要があるため、もし滝を下れば大高巻きで戻ることに。仮に出谷川まで辿り着いたとして、テンバに戻ってくる時間を逆算すると、日が暮れる可能性が高い。よって引き返すことに決定。



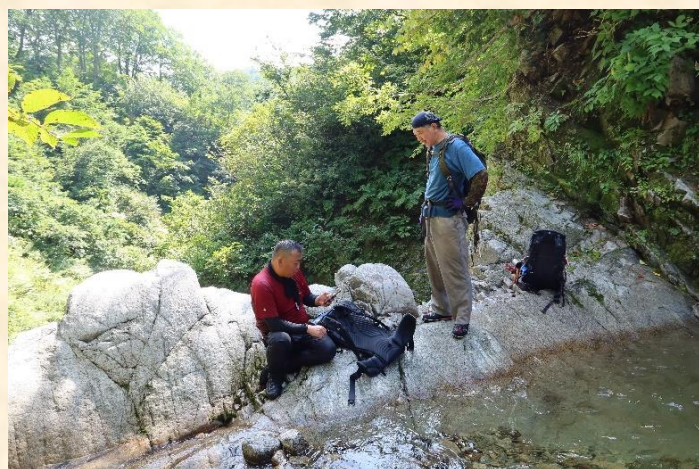
二段の滝と大貫リーダー



最高の景色
壮大なスケールに圧倒される



二段目



いや～参った！

二段の滝を突破できなかったことで、二人は冷静さを取り戻すかと思ったが、茶畑沢の革新となる大滝に直面し、むしろフォールハイの症状は悪化してしまった…。もはや手に負えない。



遊ぼうぜい！！



フォールハイ症例3

「自分はモモンガだと思い込み飛翔」



フォールハイ症例4

「プールの幻覚が見え入水」

このままでは知らないうちに奇声をあげてどこかへ行ってしまうそうなので、二人を落ち着かせるため昼食をとることに。これが功を奏し、無事にフォールハイ症候群から寛解(症状が収まること)した。

///フォールハイ劇場閉幕



源流蕎麦うめえぞお～



最高！！

目的地には辿り着けなかったものの、溪相は素晴らしかったので、二俣のところで釣りをしたいと平江さんに言うと、「**魚はいねえと思うよ**」とのこと。確かに茶畑沢では岩魚の姿を全く見ていないが、さすがにこの水量ならいるだろうと思い、竿を出す。

しかし最高のポイントに何度流しても生命反応が一切無い。驚くべきことに本当に**全くいない**と判明。そういえばテンバで料理用の水をすくうと、何度やっても必ず川虫のピンチョロやヒラタが入ってしまうことがあった。こんなことは初めてだが、エサが豊富な証拠だし魚影が濃いつてことだろうと思っていた。しかし、今思えば天敵のイワナがいないからなのかもしれない。

平江さん：「なあ？いねえだろ～。もし昔に職漁師かマタギが下流から上流へ岩魚を上げて放流とかでもしない限り、こんなに滝が連続しているところに岩魚は上がってこれないよ」



テンバへ引き返す



それにしても滝だらけ

【焚火ジャンキー(BONFIRE JUNKIE)認定】

夜、轟々と燃える焚火を眺めながら、美味いつまみで酒を飲む。うむ、良い。ただ一つ、不満があった。焚火が遠い……。タープが燃えないよう焚火はテンバから少し離れたところでやる。極上テンバであれば、焚火の周りにゴロンと寝転がることもできるが、ここは土がグチョグチョでできない。イライラが募る。

黒須：「**これじゃダメだ！焚火は皆で囲まないと！**俺の床シートを焚火の前に置くからそこで宴会！！」

平江さん：「でも床シート濡れちゃうよ？(黒須は1枚しか持ってきてないでしょ)」

黒須：「いいんです！焚火を囲むことの方が重要です！」

大貫さん：「黒須、お前はバカだねえ((笑))」

平江さん：「いいねえ～！！よしっ！お前を**焚火ジャンキーに認定**する！！」

ありがたい？ことに先輩ジャンキーお二人の仲間入りを果たすことができた。(ジャンキー：中毒者の略)

(3日目)

最終日。帰りはテンバ付近から尾根に上がり皿沢に下るルート。尾根までは意外と楽に上がることができた。1243 標高点のピーク付近は見晴らしの良い草原になっており、雄大な山々を見渡することができる。



尾根で小休止



現在地確認の大貫さん



山々を見渡す



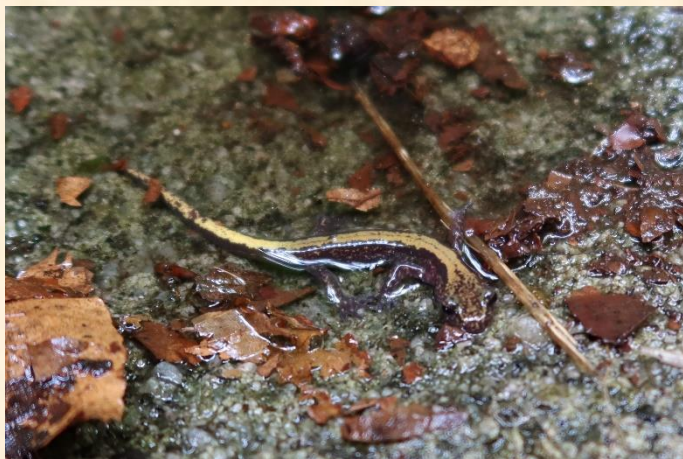
気持ちの良い眺め



草原で記念写真



下降した沢の源頭部



ハコネサンショウウオ
(背中の黄色いラインが特徴的)



倒れた衝撃で〇〇ってしまったリーダー



茶畑沢リベンジを誓って

18:00

無事に車止めに帰還。

来年は、茶畑沢の別ルートで八久和に再挑戦することを誓い、その地を後にした。